

廃棄物処理・リサイクル・OT導入促進協議会

「令和」を拓く 資源循環イノベーション

18



山本 雅資

富山大学研究推進機構
極東地域研究センター
副センター長・教授

昨今、デジタルトランスフォーメーション(DX)という言葉の認知度は大いに高まっており、資源循環分野でも数多くの取り組みがなされている。DXの形はさまざまであり、まさに創造的なイノベーションが期待されている。DXをベースにしたビジネスでしばしば登場するキーワードにプラットフォームがある。

プラットフォームとは、モノやサービスの展開の土台となる場所であり、さまざまな情報を集めたり交換したりする

DXのビジネス戦略を考える

日に練り越すことはできない。明日には消えてしまいう在庫なら安くても販売できるにこしたことはない。これは航空機の座席や英会話スクールの予約の空きなどの動脈産業にも当てはまる。

erやAirbnbである。廃棄物処理業も「練り越せない在庫」を持つ企業であり、今後のDXビジネス戦略において、

Apple Storeに無料アプリが増えれば増えるほど高まっていくと考えられるので補完財の関係にある。

たとしても安い金額で配達してくれるなら(値下げしていない)ハンバーガーの販売が伸びるのであれば、配達の赤字を補っても利益を伸ばすことができる可能性がある。しかもUber Eatsはそのような戦略をとることほできないので不毛な価格競争には発展しないであろう。

自社のコアビジネスの補完財が何かを考えるべき

る。そのインターネットというプラットフォームを土台に「追加コストなし」「完全再現」「瞬時性」というデジタル社会の特徴を最大限に活用して、多くの新しいDXイノベーションが稀にみる早さで生まれ続けている。

の企業間のビジネスにおける競争環境の特徴について考えてみたい。イノベーションのスピード感が研究者の関心を高めたこともあり、経済学の「産業組織論」という分野を中心にプラットフォームがとる戦略

オンラインtoオフライン(OMOと呼ばれる)のプラットフォームで重要な「練り越せない在庫」(レベニューマネジメント)とプラットフォームの相性が良い。OMOの分野でレベニューマネジメントを徹底して成功してきたのが、Uber

の財の需要が増えるような関係にある財のペアをいう(専門用語では交差価格弾力性が負となる財)。「コーヒーとミルク」や「万年筆とインク」などが補完財にあたる。デジタル社会では、例えばiPhoneへの需要は

DXという新しい未来のイノベーションがすぐそこまできている今こそ、自社のコアビジネスについてその補完財が何であるかを立ち止まって考えてみるべきときなのかもしれない。